

平成18年度地域貢献部門アニュアル・レポート（活動報告書）

1. 地域貢献部門について	1.1 メンバー 1.2 会合記録 1.3 メディア記事
2. 地域貢献シンポジウム2006	2.1 概要 2.2 プログラム
3. ボランティア活動支援事業	3 ボランティア活動支援事業
4. 発明クラブ	4 発明クラブ
5. 美化ボランティア事業	5 美化ボランティア事業
6. 中学生職場体験受入事業	6 中学生職場体験受入事業
7. その他支援事業	7.1 花植え事業 7.2 三鷹ネットワーク大学 7.3 言語自習室 7.4 大人のサイエンス
8. アメリカの大学の地域貢献（特別寄稿）	8 アメリカの大学の地域貢献（特別寄稿）

1 地域貢献部門

■ 1.1 メンバー

■ 委員長

福田 豊	人間コミュニケーション学科 教授
------	------------------

■ 委員（あいうえお順）

阿部 浩二	量子・物質工学科 助教授
岡部 一明	地域貢献部門客員助教授
奥 浩昭	人間コミュニケーション学科 助教授
笠原 ゆうこ	国際交流推進センター 助教授
金森 哉吏	知能機械工学科 助教授
樽林 秀一郎	附属図書館 事務長
田口 幹	リエゾン部門 助教授
田中 健次	情報システム学研究科 教授
土屋 英亮	情報基盤センター 助教授
富澤 一郎	附属菅平宇宙電波観測所 助教授
林 茂雄	量子・物質工学科 教授
宮寄 武	知能機械工学専攻 教授
研究協力課	
学生課	

1. 地域貢献部門

■ 1.2 会合記録

[第6回議事録（平成18年12月11日）](#)

[第5回議事録（平成18年11月6日）](#)

[第4回議事録（平成18年10月2日）](#)

[第3回議事録（平成18年7月31日）](#)

[第2回議事録（平成18年6月19日）](#)

[第1回議事録（平成18年5月15日）](#)

第1回地域・産学官連携推進機構 地域貢献部門会合議事録

日時 5月15日（月） 17:00-18:00

会場 西6-501

出席（敬称略・順不同）16名

福田、田口、倉林、伊藤、宮寄、岡部、笠原、樽林、林、阿部、田中、奥、土屋、
金森、長沢、黒田

議題

- 1 新年度体制について
- 2 新年度活動方針について

報告

- 1 H17年度収支報告
- 2 現代G Pの応募について
- 3 その他

議事概要

- 1 新年度体制とメンバーの自己紹介
- 2 福田部門長より、中期目標・計画にともない、リサーチセクションの設置提案と学生ボランティア支援体制の強化、アメリカの先進事例リサーチなどの説明があった。
- 3 その他

委員からの意見は以下のとおり

- ① 部門の部屋がないことに関して
→ 三木機構長へ連絡済み、引き続き打診していく
- ② 部門が学内組織であるという認識がされていない
→ 引き続き担当理事、学長、学内へのアプローチを行う
- ③ 発明クラブ 組織拡大による将来的影響への危惧

④ 電通大ならではの地域貢献、教育に絡むボランティア

⑤ 学生ボランティア支援システムの活用

4 福田部門長より平成17年度収支報告と平成18年度予算が報告された。

5 福田部門長より現代GP申請の報告がされた。

6 長沢研究協力課長より、中期目標・中期計画についての説明があり、とくに三鷹ネットワーク大学への協力は課題という報告があった。

7 長沢研究協力課長より、調布市からの大人向けサイエンス、八王子市立別所中3年生の本学見学、府中市立第2中学校の職場体験、朝日養護学校等々、近隣からの依頼についての報告があった。

次回は6月19日（月）18:00 西6-501

第2回地域・産学官連携推進機構 地域貢献部門会合議事録

日時 2006年6月19日（月）18:00-20:00

会場 電気通信大学 西6-501

出席者 （順不同・敬称略）16名

福田、田口、長沢、黒田、岡部、林、金森、倉林、伊藤、笠原、阿部、宮寄、富澤、樽林、土屋、奥

議題

1 18年度事業計画について（各担当者から）

2 その他

●議事概要

1 18年度事業計画について

以下の報告は活動実績とブレインストーミングを含めたものによる。

① 図書館（樽林委員）

『調布電通大どおり』No.7春/夏号にもとづいて、図書館のコミュニティサービスの説明があった。

課題として、オンラインジャーナルのアクセス問題、貸出、回収、自習室等があり、長期的な取り組みが必要

② 情報基盤センター（土屋委員）

実績として、ネットワーク構築支援、セキュリティ活動、専門教育・講座のための講座、技官の講習会がある。

将来は中高生対象のスーパーコンピューティング体験講座なども考えられる。

課題としては、フィルタリング、体制の問題等がある。

③ ネットワーク大学（田口委員）

14研究機関による合同学校説明会（進学説明会）について検討、意見交換があった。

秋季講座（4学期制）を公募する。

④ ボランティア支援活動（宮崎委員）

ミスマッチ、期限等の問題、課題を検討していく。

利用規定にある文言および責任問題について顧問弁護士に確認することとした。

⑤ 美化ボランティア（阿部委員）

続けることに意味があるので、自発的な活動の支援、広報活動を継続して行う。

昨年度、実現出来なかったサントリーとの協働ボランティアについては再考。

⑥ 国際交流のまとめ（笠原委員）

従来の活動を部門の事業として位置づけることができるかどうか検討する。

⑦ 菅平・広報室（富澤委員）

林間学校として目黒区内小学校の受け入れ。

アマチュア無線連盟等、地域・社会還元活動を実践しているが、マンパワー不足が課題。

広報室メンバーとして、部門との連携強化に伴い、橋渡しの役割を担った活動としたい。

⑧ ロボコン（金森委員）

依頼は多いが、対応するスタッフのスケジュール等問題がある。

⑨ その他（奥委員、福田部門長）

個人で行っている外国語による活動、また言語室における一般市民対象映画会の開催の実現を模索している。

部門専用部屋については、引き続き本部長に依頼する。

ボランティア登録をする学生のためにPCを学生課に常設する。

（上記については、翌日倉林・伊藤委員（学生課）の対応により、現在学生課に常設しているPC2台が利用可能となった。）

●報告事項他

1 発明クラブ（林委員・長沢課長）

平成18年度大学等開放推進事業（大学Jr.サイエンス事業）に応募

現在、発明クラブOB(中学生)がリーダー的役割をしている。

出前講義活動を予定

2 推進本部運営委員会から（福田部門長）

資料回覧

3 その他の報告（長沢課長）

調布市から依頼のあった、大人向けサイエンス教室は非常勤講師竹内先生の担当となった。

5月19日別所中学校の20名が本学見学（図書館、リサーチユ）

府中第2中の職場体験は8月を予定している

調布市から商工会を通じて、市内中学校の職場体験受け入れ依頼があった

朝日養護学校の件は検討中

6月21日日花植え作業が行われる予定

次回第3回部門会議は7月31日(月)16:00-17:30 西6-501 17:30-暑気払い会費千円

第3回地域・産学官連携推進機構 地域貢献部門会合議事録

日時 2006年7月31日（月） 16:00-17:50

会場 電気通信大学 西6-501

出席者 12名（順不同・敬称略）

福田、笠原、奥、倉林、樽林、土屋、林、田中、黒田、田口、岡部、長沢

議題

1 地域貢献シンポジオン2006

2 その他

報告

1 発明クラブ

2 米国における大学とコミュニティの連携について

3 その他

議事概要

1 林委員より、北部公民館他活動内容についての報告があった。

ものづくり体験教室、富士見児童館（8月18,19,26,30）等活動予定が紹介された。

2 福田部門長より松田理事への活動紹介・意見交換の報告があった。

専用部屋は本館に用意される予定。

3 部門長より地域貢献シンポジオン2006企画案の説明があり、第Ⅰ部美化ボランティア・キックターゲット、第Ⅱ部研究事例発表会・ポスターセッションという構成および企画の基本方針が了承された。企業の研究発表においては事例の他1本でも研究に近いものがあるとなお良いという意見があった。また、企画の今後の広報活動等においては地域貢献部門メンバー全員の協力が要請された。

4 第2回議事概要を再確認した。

＊樽林委員より図書館における地域貢献について、業務上問題点等の説明があった。また、図書館の地域開放は部門事業として展開すべきものであるとの、継続的に検討していくことになった。

＊情報基盤センターについては人手不足であり、単独ではＩＴ関連事業を担うことは困難であるという状況説明があった。これに対し、負担を分担して引き受け、協力体制を工夫するなどして、電通大の独自の地域貢献活動として育てていくべきであるという見解が部門長より示された。

＊外国語(英語)関連の地域貢献活動として、奥委員より言語自習室におけるＤＶＤやＰＣソフトの利用公開を検討中である旨説明があり、次回にまた報告することとなった。

5 岡部客員助教授より、「アメリカの大学の地域貢献」について報告があった。

以下一部抜粋

州立大学のエクステンションはシラバスを初め本格的であり、活動は地域貢献でなくごく当たり前のこととなっている。

その他NPOの人材育成、サービスラーニングについての紹介があった。

次回は10月2日（月）16:30 西6-501

アニュアルリポートの構成方針その他について検討・協議する予定

第4回地域・産学官連携推進機構 地域貢献部門議事録

日時 2006年10月2日（月）16:30-18:00

会場 電気通信大学 西6-501

出席者 14名

福田、岡部、長沢、井田、榑林、金森、阿部、伊藤、田中、林、土屋、富澤、田口、笠原、

議題

1 ボランティア活動の支援体制について

2 地域貢献シンポジオン2006

3 その他

報告

1 発明クラブ

2 その他

● 議事内容

1 福田部門長より、国大協における小冊子「国立大学による地域貢献活動」の刊行において、広報室と協議の結果、地域貢献シンポジオンと発明クラブをテーマにした記事としたことが報告された。

2 富澤委員より、広報HP資料にもとづき、三鷹ネットワーク大学で開催された三鷹ネットワーク大学参加教育・研究機関合同学校説明会参加報告があった。

3 林委員より、資料にもとづき発明クラブの上半期活動の報告があった。

11月調布祭で葛飾の発明クラブと連携をとったイベントを行うこととなっている。

環境報告書にある活動報告が事後承諾となっていた。

4 金森委員より、回覧資料運動会ルールブックとともに、資料にもとづき第9回電通大ロボットアイデアコンテスト開催についての説明があった。

5 田口委員より、三鷹ネットワーク大学において10月15日から3日間、F 科丹羽先生の講座開設の説明があった。

6 長沢課長より、調布市、府中市の中学生の職場体験について説明があった。

府中第2中学校、調布市立第5中学校、その他10月調布市内中学校、府中市立浅間中学校を受入予定。

7 福田部門長より、ボランティア活動の支援体制について、学生課、地域貢献部門の役割分担について問題提起があった。

伊藤委員より、資料にもとづき学生課におけるボランティア関係業務、対応についての説明があった。サークルを対象とした募集以外についての情報提供は、地域貢献部門ウェブで統一することとした。専任不在のため、学生の苦情窓口については、継続協議事項とする。

また、昨年協議された学生表彰推薦について、各学科長推薦との関連については懸案事項、継続協議となった。

8 福田部門長より、ボランティア依頼システム利用規定の文言について、顧問弁護士からのアドバイスが紹介され、協議した結果、文言一部を加筆し更新することとなった。

9 福田部門長より、地域貢献シンポジオン2006企画案について、説明があった。

10 美化ボランティア活動については、阿部委員に一任することとなった。

11 岡部客員助教授より、ポートランド州立大学のレポート報告があった。

次回は11月6日（月）16:30より開催

第5回産学官連携推進本部・地域貢献部門会合議事録

日時 2006年11月6日（月）

会場 電気通信大学 西6号館501号室

出席者 12名

岡部、福田、長沢、樽林、奥、笠原、倉林、土屋、田口、阿部、林、井田

議題

1 学内教職員のボランティア活動組織化支援体制について

2 今年度部門活動報告書（アニュアルレポート）作成方針について

3 学生表彰規定について

4 美化ボランティアイベント実施体制について

5 地域貢献部門シンポジオン2006体制について

6 その他

○報告

奥野委員より

中高生対象40人定員にトトロ英語版を11月18日（土）19日（日）に言語自習室で上映します。

長沢課長より

中学生の職場体験

調布中学校から3名受け入れ

総務、研協、図書館で対応

11月22日大学見学 日大三島中学

富澤委員のメールから

12月4日 電通大ツアー

発明クラブ

林委員より

富士見児童館では模型飛行機大会

葛飾発明クラブとの連携については、今年度はロボコンへの参加と指導員との交流となっている。

○議事内容

1 学内教職員のボランティア活動組織化支援体制について

福田部門長より

ボランティア活動支援体制

タスクフォースによる原案作成。

宮寄委員が主査となり、阿部委員、金森委員が担当。

教職員によるボランティア活動の顕在化、組織化を図る。

2 今年度部門活動報告書（アニュアルレポート）作成方針について

部門長より、2006年度はウェブ上で活動報告をし、冊子は2年に1度とする。

従来の項目以外に

言語自習室活動は動員等の様子を見ながら

3 学生表彰規定について

現行の表彰方式

昨年度から地域貢献部門が推薦者となるよう、

表彰の区分 社会活動で特に顕著な功績があった学生等

推薦者 現行 教職員 改定案 教職員及び地域貢献部門長

4 美化ボランティアイベント実施体制について

実施体制

レクレーション

生協の共催

オリジナルロゴ

5 地域貢献部門シンポジオン2006体制について

部門長より、チラシ

動員の依頼

次回は12月11日（月）16:30-18:00

第6回地域・産学官連携推進機構 地域貢献部門会合議事録

日時 2006年12月11日（月）16:30-18:00

会場 電気通信大学 西6-501

出席者 11名 福田、長沢、林、宮寄、樽林、奥、倉林、田中、土屋、笠原、阿部

議題

1 新年度予算（体制）について

2 06報告書（Web版）

3 その他

報告

1 発明クラブ

2 地域貢献シンポジオン

3 美化ボランティア

4 表彰規定

5 その他

議事内容

1 第5回議事録案を承認した。

2 林委員より、発明クラブ活動報告があった。

活動の様子が日経新聞12月8日夕刊に紹介された。

12月14日調布市総合友好協力協定締結大学見学会に工作教室がこれに協力した。

調布市立第一小学校からの依頼、算数補習の補助協力については、目黒会有志と校長先生の話し合いに委ねられることになった。

3 資料にもとづき、美化ボランティア活動について阿部委員より以下の報告があった。

昨年度に比べ参加者増となり、活動に対する認識が深まった。他方、調布祭期間中に実施することが適当か否かが課題として残った。

4 資料にもとづき、福田部門長より地域貢献シンポジオン2006の報告があった。

5 資料にもとづき、福田部門長より18年度収支報告、19年度予算案について説明があった。さらに長沢

課長より、人件費についての追加説明があった。

来年度から非常勤職員（パート）を週1-2回で採用することとなった。

6 配布資料にもとづき、来年度予算について協議した結果、アクティビティベースに重きをおく予算要求を行っていくこととした。

7 長沢課長より、11月28日-30日調布中学校職場体験、12月7日8日府中市浅間中学校職場体験についての報告があった。

8 資料にもとづき、18年度活動報告ウェブ版の項目について担当者の割り振りを行った。項目は原則17年度版と同様とするが、新たな言語学演習、ロボコンについては担当者と確認・検討することとなった。

9 資料にもとづき、福田部門長より学生表彰規定改訂についての報告があった。

10 調布市総合友好協力協定締結大学見学会への協力について協議の結果、次回からは広報室から教官協力要請依頼をするのが妥当という結論となった。

次回は1月29日（月）16:30-18:00

1. 地域貢献部門

■ 1.3 メディア記事

- ▽【'06,12.1 日本経済新聞（夕刊）】小学生に高まる発明熱 脱「理科離れ」各地にクラブ ユニーク実験など好評
電気通信大学 調布少年少女発明クラブの紹介
- ▽【'06,10.27 日刊工業新聞】地域とCSRでシンポ 電気通信大学
- ▽【'05,11.16 フジサンケイ ビジネスアイ】地域貢献シンポジオン 電気通信大学

2 地域貢献シンポジオン2006

■ 2.1 概要

昨年に引き続き、「新たな産学連携ーコミュニティとCSRー」をテーマとして「地域貢献シンポジオン2006」を企画・実施した。

●開催趣旨

サステナブルな社会・経済システムの構築に向けて、企業も大学も社会における自らの機能と役割を見つめ直す必要に迫られている。企業においてはCSR（企業の社会的責任）が、大学においては地域貢献が課題になっているのがその具体的な現れである。これを別の角度から言い直すと、企業も大学も、社会やコミュニティを視野に入れた、これまでとはひと味違った行動様式を自ら開発したり実践したりするところが、来るべき社会の先導者となりうるということでもある。

昨年に引き続き、新たな経済・社会システムの担い手としてわれわれができること、しなければならないことをコミュニティや生活者という観点から検討し、連動・連携の環をひろげるとともに、その基盤作りに着手する。

●日時 11月19日（日）11:00-17:00

●会場 電気通信大学創立80周年記念会館（リサーチ）3階

●実施概要

■ポスター展示の部11:00-13:00

昨年参加の4社にはそれぞれの活動についてポスター展示という形で紹介してもらった。

リサーチ3階のオープンスペースに、A1の紙が2枚貼れるA0（エイ・ゼロ）のスペース（90cm×210cm）を各社に提供し、ビジュアルなパネルやポスターの展示を行った。

そのテーマは以下のようなものであった。

・アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）

「難病と闘う子どもたちとその家族のために」

・FC東京

「FC東京都コミュニティ」

・Suntory

「水と生きるSuntoryー社会と自然との共生をめざしてー」

・西友

「流通とコミュニティ」

■研究報告発表の部（13:30-15:00）

今年は昨年の4社に加え、新たに、セブン&アイHLDGS.、小田急電鉄、東京電力の3社の参加が得られたので、この3社からそれぞれのCSR活動に関して30分ほど報告してもらった。

各社の発表タイトルと発表者は以下のようなものであった。

・(株)セブン&アイホールディングス

テーマ：「産学連携による食品リサイクルへの取り組み」

発表者：総務部環境推進シニアオフィサー 山口秀和氏

・小田急電鉄(株)

テーマ：「小田急の社会・環境活動について」

発表者：法務・環境統括室環境担当課長 末廣好男氏

・東京電力(株)

テーマ：「地域との共生を目指して」

発表者：東京電力(株)企画部経営調査グループマネージャー 久米俊郎氏

■パネルディスカッションの部（15:15-16:45）

パネルディスカッションには上記研究報告発表の各社担当の方と、昨年参加3社の担当者の方に参加してもらった。

昨年参加各4社のうち参加いただいた3社のご担当の方は、以下の方々であった。

アフラック：

広報部社会公共活動推進グループ主任 寺門神次郎氏

東京フットボールクラブ(株)（FC東京）：

コミュニティアフェアーズマネージャー 久保田淳氏

Suntory

文化・社会貢献本部スポーツフェロシップ推進部長 本城和彦氏

コーディネータは地域貢献部門長の福田豊、コメンテーターは地域貢献部門客員助教授の岡部一明であった。

【ディスカッション概要】

日米のNPO活動に詳しい岡部氏から、アメリカのCSRとコミュニティの関連などについて紹介があった後、コーディネータから以下のような点について各社に問いかけがなされ議論がなされるとともに、フロアからの質問も受け

て、質疑応答があった。

（１）ＣＳＲを展開していく上で、「地域」「コミュニティ」はどのような意味を持つのだろうか？

（２）ＣＳＲ活動が正当に評価されるように、何らかの取り組みが必要であるが、この点についてどう考えているか
以上、必ずしも十分な時間ではなかったが、新たな社会文脈形成の可能性を秘めるＣＳＲに関して本質的な議論があり、大学の関与の可能性（新たな産学連携）を模索する新たなアプローチとして、昨年引き続き着実に歩を進めることが出来たと考えられる。

●参加者数：約43名

電気通信大学 地域貢献シンポジオン2006

平成18年11月19日(日)

研究発表・ポスター展示

時 間 ● 11:00-16:45

会 場 ● 創立80周年記念会館(リサーチ)3階

テーマ ● 新たな産学連携ーコミュニティとCSRー

参加企業／アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社)
(50音順)

FC東京

小田急電鉄(株)

SUNTORY(株)

(株)西友

(株)セブン&アイホールディングス

東京電力(株)

参加費
無料

趣 旨

サステナブルな社会・経済システムの構築に向けて、企業も大学も社会における自らの機能と役割を見つめ直す必要に迫られている。企業においてはCSR(企業の社会的責任)が、大学においては地域貢献が課題になっているのがその具体的な現れである。

これを別の角度から言い直すと、企業も大学も、社会やコミュニティを視野に入れた、これまでとはひと味違った行動様式を自ら開発したり実践したりするところが、来るべき社会の先導者となりうるということでもある。

昨年に引き続き、地域貢献シンポジオン2006を開催し、新たな経済・社会システムの担い手としてわれわれができること、しなければならないことを検討し、連動・連携の環をひろげるとともに、その基盤作りに着手する。

電気通信大学フォーラム2006

- | | |
|-------------------|-----------------------------------|
| 大 学 紹 介 | 11月17日(金)~19日(日)
[研究室公開、大学講演会] |
| オ ー プ ン キ ャ ン パ ス | 11月18日(土)
[模擬授業、入試説明会] |
| 保護者のための就職ガイダンス | 11月18日(土)・19日(日) |



調布駅北口から徒歩約5分
東京都調布市調布ヶ丘1-5-1

研究発表・ポスター展示

11月19日(日)

- 11:00ー13:00 ポスター展示(2005年度参加各社)
「難病と闘う子どもたちとその家族のために」
アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社)
「FC東京とコミュニティ」FC東京
「水と生きる SUNTORY--社会と自然との共生をめざして」
SUNTORY(株)
「流通とコミュニティ」(株)西友
- 13:30ー14:00 研究発表1「産学連携による食品リサイクルへの取り組み」
(株)セブン&アイホールディングス
総務部環境推進シニアオフィサー 山口秀和
- 14:00ー14:30 研究発表2「小田急の社会・環境活動について」
小田急電鉄(株) 法務・環境統括室 環境担当 課長 末廣好男
- 14:30ー15:00 研究発表3「地域との共生を目指して」
東京電力(株)企画部経営調査グループマネージャー 久米俊郎
- 15:15ー16:45 パネルディスカッション
パネリスト 6社ご担当者(ポスターセッション、研究発表)
コメンテータ 岡部一明(電気通信大学客員助教授)
コーディネータ 福田豊(電気通信大学教授)

申込方法

以下のいずれかでお申込みください。

WEB参加登録●URL <http://www.uec.ac.jp>
F A X●042-443-5518

※下記の参加申込み書に、氏名・郵便番号・住所・電話番号・e-mail・
所属をご記入していただいた用紙を送信してください。

問合せ先

e-mail : desk@dcc.uec.ac.jp FAX : 042-443-5518

----- キリトリ線 -----

参加申込み書 (FAXでお送りください)

- 個人情報の扱いについて ●ご登録いただいた各種データは、本学のイベントのご案内等、広報活動等に使用することがありますが、それ以外の目的には使用いたしません。
- お預かりした個人情報を保護するために、合理的な安全対策を講じます。
 - 継続して保管する必要がなくなった個人情報は消去いたします。
 - 管理する個人情報について、本人から開示要請を受けた場合には必要な対応をいたします。

氏 名			
郵便番号 住 所			
電話番号		e-mail	
所 属			

3. ボランティア活動支援事業

■ 3. ボランティア活動支援事業

主旨：大学の地域貢献活動の一環として、学生の各種ボランティア活動への参加を求める依頼が増加している。特に、初中等教育機関での教育補助ボランティアへの要請が多い。従来、このような依頼は学生課を通じる場合と教員・職員への個人的なつながりによる場合があった。前者では学生掲示板にボランティア募集の掲示を行い、全学生へ周知したが、不特定多数への呼びかけのみでは学生の関心を集めることができなかった。後者の場合には、パイプ役となった教職員周囲の学生に周知・斡旋することで、迅速かつ効率的にボランティア活動へ対応できる。しかし個人的なレベルでの斡旋は教職員に重い負担をかけるとともに、量的な限界があった。より広範な依頼をより多くの学生へ効率的に周知するために、ボランティア活動支援システムを構築し、その運用を行った。

内容：平成18年度は、平成17年度に引き続き、以下の3項目の支援事業を展開した。

1 ボランティア活動への学生登録システム

ボランティア活動への意識の高い学生を抽出して登録させることで、応募確率の高い母集団を準備している。具体的な学生登録はWeb上で行うシステムを構築し、平成17年4月から運用を開始している。平成19年2月時点での登録学生は61名である。

2 ボランティア活動依頼システム

より広範なボランティア活動依頼を受け付けるために、Web上で依頼を受け付けるシステムを構築した。現段階では教育機関や公共機関からの依頼のみを受け付けることとしている。電子メールを用いて1で登録された学生に依頼内容を迅速に周知し、その後の具体的な交渉は依頼者と学生に委ねている。平成19年2月時点までのボランティア依頼は7件である。

3 ボランティア活動報告

ボランティア活動を行った学生には書面もしくはPDFファイルでの活動報告書を提出させている。報告書の事例を分析することで、ボランティア支援システムの改善点を探る。

平成18年度ボランティア活動依頼の概要			
NO.	受付日	事業名	団体名
1	2006/4/14	サポートティーチャー	東京都立調布北高等学校
2	2006/5/23	ソニーマーケティング 学生ボランティアファント	ソニーマーケティング(株)
3	2006/6/6	バリアフリーパソコン教室	バリアフリーパソコン教室
4	2006/6/27	学校教育支援学生ボランティア	調布市教育委員会教育部指導室
5	2006/7/9	夏休み子ども日本語教室	調布市国際交流協会
6	2006/9/28	都立調布養護学校PTA“ぐーちょきパーティー”	都立調布養護学校PTA
7	2006/10/3	第24回あけぼの福祉会リサイクルバザー	社会福祉法人あけぼの福祉会
8	2006/10/13	遊ing	調布市役所社会教育課
9	2006/10/15	軽度発達障がい児対象プログラムボランティアセミナー	東京YMCA東陽町ユイルネスセンター
10	2006/10/15	ソニーマーケティング 学生ボランティアファント	ソニーマーケティング(株)
11	2006/10/30	2006体験ボランティア	日本学生支援機構
12	2006/11/22	第8期不登校・ひきこもりの子ども・若者を支援するボランティア体験	神奈川県立青少年センター
13	2006/11/22	国際ボランティア・デーフォーラム	「広がれボランティアの輪」連絡会議
14	2006/12/7	災害支援ボランティア講座	災害支援ボランティア推進委員会
15	2006/12/11	国立科学博物館教育ボランティア	国立科学博物館ボランティア活動推進室
16	2007/2/27	H18年度青年長期ボランティア計画活動報告会	社団法人日本青年奉仕教会
17	2007/2/27	NPO・ボランティアまつり	府中市
18	2007/3/6	「2007東京TAMA音楽祭」ボランティア	ネットワーク多摩

19	2007/3/16	バザーのお手伝い	調布を耕す会
20	2007/3/23	「国際文化交流フェスティバル」ボランティア	ネットワーク多摩

4. 発明クラブ

■ 4 発明クラブ

1. 概略

創立80周年記念会館を活動拠点とし、目黒会員、退職教員、および現職教員が指導員となって、2004年10月18日に開設した。同年11月に活動を開始して以来、今までに月2回のペースで毎回30～40人の地域の小中学生に工作活動、創作活動等を通して、理科の楽しさと発明の喜びを味わわせることができた。

2. 組織

2. 1. 組織

会長 林 茂雄

副会長 安田 耕平

顧問 益田 隆司

顧問 前田 隆正

○ 企画運営委員会

委員長 林 茂雄

副委員長 安田 耕平

委員 宇津木光次郎（調布市）

// 高橋 俊明（調布市教育委員会）

// 池谷 主税（調布市商工会）

// 藤野 馨

// 宮下 武重

// 三橋 渉

○ 指導員（2007年度）

有山 正孝 電通大名誉教授、（元）学長

井沢 幸生 電通大卒業生（目黒会会員）

石川 洋一（元）電通大教授

伊理 武男 電通大名誉教授

内海 基裕 電通大卒業生（目黒会会員）

上田 武彦 電通大卒業生（目黒会会員）

大熊 直彦 電通大卒業生（目黒会会員）

大嶋 榮生 電通大卒業生（目黒会会員）

太田 章 電通大卒業生（目黒会会員）

大村 吉元 電通大卒業生（目黒会会員）

木下 實 電通大卒業生（目黒会会員）

草間 篤 電通大卒業生（目黒会会員）

小林 宏 電通大卒業生（目黒会会員）

高須 昭彦 電通大卒業生（目黒会会員）

中田 良平（元）電通大教授

藤野 馨 電通大卒業生（目黒会会員）

松嶋 武彦 電通大卒業生（目黒会会員）

宮下 武重 電通大卒業生（目黒会会員）

村上 弘芳 電通大卒業生（目黒会会員）

八木 克育 電通大卒業生（目黒会会員）

2. 3. 会員構成（2006年4月）

小学6年 6名

小学5年 9名

小学4年 12名

小学3年 13名

合計 40名

（注）上記正規会員の他に、昨年度の正規会員のうちで継続して会員になりたいもの 17名を特別研究生とした。

3. クラブ活動

3. 1. 活動形態

2つの形態からなる。

1）発明クラブ固有の活動

狭い意味のクラブ活動である。月1回、課題製作を継続して行うのが典型的な形態である。育成するという意識をもって対応している。

2)工作教室と合同して行う活動

毎回、一般からの参加者と一緒に行う。その日で完結させる。自宅に持ち帰って 保護者にほめてもらえるよう配慮している。

3)特別研究生クラスの活動

昨年度の正規会員のうちで継続して会員になりたい者を特別研究生とした。

原則として自主的活動を行なうこととしている。

3. 2. 活動記録

詳細はweb page(<http://www.dcc.uec.ac.jp/inv80/index.html>)と添付資料 を参照されたい。

その他、次のようなイベント参加が特筆される。

1) 2006年10月12,13日：発明クラブ全国会議に林会長と藤野指導員が出席した。

2) 2006年11月23日：ものづくり体験教室全国大会に本クラブ所属小学5年生男子 が参加した。

4. 広報活動およびマスコミ取材

4. 1. 広報

1) ホームページの開設

<http://www.dcc.uec.ac.jp/inv80/index.html>を定期的に更新している。

2) 調布祭（大学祭）で作品展示

2006年11月の調布祭で発明クラブ・工作教室での製作品を展示し公開した。

3) 調布市主催の「連携大学体験会」で活動について説明

2006年12月14日、約20名の調布市民に対して作品展示とパネル説明を行なった。

4. 2. マスコミ取材等

1) 新聞

日本経済新聞が発明クラブについて報道した。その中で本クラブが写真と共に取り上げられた（12月）。

2) ケーブルテレビ J-COM の取材を受けた(11月)。

5. 添付資料

1) 発明クラブ活動記録(pdf)

発明クラブ・工作教室活動状況 (2006年度)

2007/2/10

日付	通し No.	No.	活動内容	活動形態	場所
2006/4/8	30	1	開講式 講話「ぼくのいたずら理科体験」 「マンガン乾電池をこわしてみよう」	発明クラブ	リサーチ3F
2006/4/22	31	2	万華鏡を作ろう	発明クラブ・工作教室	リサーチ3F
2006/5/13	32	3	ステアリングカーを作ろう (1)	発明クラブ	F科 電子工学実験室
2006/5/27	33	4	ヘロンの噴水を作ろう	発明クラブ・工作教室	C棟102教室
2006/6/10	34	5	ステアリングカーを作ろう (2)	発明クラブ	リサーチ3F
2006/6/24	35	6	ホバークラフトを作ろう	発明クラブ・工作教室	リサーチ1F
2006/7/8	36	7	ステアリングカーを作ろう (3)	発明クラブ	リサーチ3F
2006/7/22	37	8	ペットボトルロケットを作ろう	発明クラブ・工作教室	リサーチ3F+西キャンパステニスコート
2006/7/28,29	-		ペットボトルロケットを作ろう／ヘロンの噴水を作ろう	出前講座	北部公民館
2006/8/8	-		ヘロンの噴水を作ろう	出前講座 (かしわ子供会)	リサーチ1F+中庭
2006/8/18,19	-		文部科学省「ものづくり体験教室」	発明クラブ・工作教室	リサーチ3F
2006/8/26	38	9	ステアリングカーを作ろう (4)	発明クラブ	リサーチ3F
2006/8/30	-		切り抜き飛行機とブーメランを作ろう	出前講座	富士見児童館
2006/9/9	39	10	ステアリングカーを作ろう (5)	発明クラブ	リサーチ3F
2006/9/23	40	11	磁気感应式ラジオを作ろう	発明クラブ・工作教室	リサーチ3F
2006/9/30	-		ペットボトルロケットを打ち上げよう	出前講座	八雲台小学校
2006/10/7	41	12	光オルゴールを作ろう (1)	発明クラブ	リサーチ3F
2006/10/28	42	13	2ロータ式ヘリコプターを作ろう	発明クラブ・工作教室	リサーチ3F、講堂前広場
2006/11/1	-		模型飛行機を飛ばそう	出前講座	富士見児童館
2006/11/11	43	14	光オルゴールを作ろう (2)	発明クラブ	リサーチ3F
2006/11/18,19	-		調布祭展示		リサーチ1F,2F
2006/11/25	44	15	飛行機はなぜ飛ぶの？ 流れと遊ぶコンテスト	発明クラブ・工作教室・理科宮寄研・武蔵野パーパーブ レーンクラブ澤田さん・JAXA	リサーチ3F 第一小学校
2006/12/2	45	16	光オルゴールを作ろう (3)	発明クラブ	リサーチ3F
2006/12/9	46	17	光オルゴールを作ろう (4)	発明クラブ	リサーチ3F
2006/12/16	47	18	光オルゴールを作ろう (5)	発明クラブ	リサーチ3F
2006/12/23	48	19	光オルゴールを作ろう (補習1)	発明クラブ	リサーチ3F
2007/1/13	49	20	光オルゴールを作ろう (補習2)	発明クラブ	リサーチ3F
2007/1/27	50	21	万華鏡を作ろう	発明クラブ・工作教室	リサーチ3F

(注) 特別研究生クラス (2005年度の会員のうちから希望者) も各回活動した。

5. 美化ボランティア事業

■ 5. 美化ボランティア事業

昨年2006年度立ち上げた美化ボランティアを本年度も地域貢献シンポジオン2006の企画の一環として行った。本年度の参加者は49名（学生34名、教職員15名）であった。なお、本年度より電通大生協との協賛による活動となった。

会合記録

○第1回美化ボランティア会合

日時 10月6日（金）12:00-13:00

会場 西6-501

出席 5名

F阿部、M水野4、夜間主M科2名、和泉

資料（第1回美化ボランティアイベント会合メモ）美化ボランティア活動は毎年続けることを念頭に置き、活動準備を効率的に行う為にメールでの打ち合わせを行った。

活動記録

10月6日 第1回美化ボランティア会合

11月2日 電通大学生協と美化ボランティア活動の協賛が決定した。

11月7日 美化ボランティア活動実施案内を学内メール及びちらしで教職員及びボランティア登録学生へ周知を行った。

11月18日 美化ボランティア活動実施（学外ゴミ拾い活動9:50より1時間、参加者49名）

ビンゴゲーム、（景品は大学生協より）

キックボーリング（景品は大学生協より）

11月30日 学内メールにて美化ボランティア活動の報告を行った。

組織（メンバー）

阿部 浩二（電気通信大学 量子・物質工学科助教授）

水野 正博（電気通信大学 知能機械工学科4年生）

富樫 陵（電気通信大学 知能機械工学科3年生）

岸本 長（電気通信大学 知能機械工学科3年生）

地域貢献部門

研究協力課

■添付資料([txt](#))

***** 美化ボランティア 添付資料 *****

試料 1

◇ 第1回美化ボランティアイベント会合メモ

日時 8月4日（木） 10:30-12:00

議題

1 第2回美化ボランティア活動実施

清掃地域

活動の広報 学内メール ポスター

電通大通りでの記事

2 清掃後のイベント企画

以下のことが決定した。

●美化ボランティア（雨天中止）

日時 11月18日（土） 9:30-12:00

集合場所 講堂前

備考 参加賞・賞品多数あり

9:30 集合・受付開始

受付終了後 活動開始

11:00 活動終了

片付終了後 レクリエーション開始

12:00 解散

12:00 美化ボランティア参加者以外のレクリエーション開始

13:00 レクリエーション終了

レクリエーションの内容については学生達とメール会議で進めることとなった。

* *****

試料 2

活動報告書

* * * * *

職員各位

地域・産学官連携推進機構

産学官等連携推進本部

地域貢献部門

美化ボランティア世話人 阿部浩二

美化ボランティア活動報告について

1 1 月 1 8 日(土)天候に恵まれ第 2 回「美化ボランティア」活動を行いました。

【実施内容】

9:30 集合・受付

9:50～10:50 大学周辺ゴミ拾い

11:00～11:30 レクリエーション（ビンゴゲーム）

11:30～12:30 イベント（キックボーリング）

【参加人数】

学生 34名

教職員 15名

拾ったゴミの量は可燃ゴミ袋 1 袋、不燃ゴミ袋 2 袋（大学専用のもの）でした。
ゴミの内容ではタバコの吸殻、タバコの空箱、お菓子の包み紙が目立ちました。
ボランティア学生によるレクリエーションイベントのキックボーリングは大学祭に
訪れた家族、小学生に楽しんで貰う事が出来ました。

今回の活動には昨年よりも多いボランティア参加があり、特に教職員の方の参加者が増えたことはボランティア活動への理解に繋がるものと期待しております。来年はさらに多くの方に参加して頂くことを願っております。

最後に、ボランティア活動に参加していただいた皆様と趣旨に賛同して協力していただいた電気通信大学生生活協同組合にお礼申し上げます。

6. 中学生職場体験受入事業

■ 6. 中学生職場体験受入事業

「中学生職場体験」は、進路指導と総合的な学習の一環として、地域にあるさまざまな事業所や施設などを活用して、生徒自らが直接働くことを通じて、そこに働く人たちの苦勞や喜び、また仕事の大切さや難しさなどを学習するとともに、自己の将来について積極的に考えていく態度を養うことを目的に実施されているものである。職場体験事業の受入れについては、地域貢献部門の一事業として位置づけ、平成17年度から実施している。本学においても、平成18年度には次の4中学校から受け入れた。

8月28日～30日 府中市立府中第二中学校 2年生 4名

9月20日～22日 調布市立第五中学校 2年生 3名

11月28日～30日 調布市立調布中学校 1年生 3名

12月7日・8日 府中市立浅間中学校 2年生 6名

受入れは、総務部総務課・研究協力課、学生部の各課、附属図書館等で行い、職員の指導の下に、書類の整理、学内郵便物の集配、データ入力、簡単なHPや文書作成などの作業を行った。

職場体験を終えた生徒からは、「小さな積み重ねが大きなものになっていくことが分かり、一つ一つを責任をもって取り組もうと思った。」、「仕事は多くの人のことを考えながらしなければいけないものということを実感した。」、「この経験を将来に少しでも役立てていきたい。」などの感想があった。

7. その他支援事業

■ 7.1 花植え事業

調布市民ボランティアグループ「調布花・はな」による花植え事業は、平成15年にスタートしたもので、平成18年度も春・秋の二回、花植え作業が行われた。花植え作業は、本部棟玄関前広場の花壇で、教職員・学生も加わって行われたが、花・はなグループではこの他、保健管理センター北側の学生が集う広場の池周辺にも花植えを行っている。

第1回 6月21日（水）10:00－11:00、参加者：教職員29名、学生5名

第2回 10月27日（金）10:00－11:00、参加者：教職員18名、学生5名

第1回の花植え作業では、益田学長や理事の方々も参加されて行われ、冒頭、益田学長からボランティアグループに謝辞が述べられた。当日は、小雨にもかかわらず、教職員、学生合わせて34名が参加し、サルビアやマリーゴールドなどの花が植えられた。

第2回では、教職員、学生合わせて23名が参加し、グループの方々の指導を受けながら、パンジーやチューリップの球根を植えた。

■ 7.2 三鷹ネットワーク大学

平成18年度の三鷹ネットワーク大学への協力は、量子・物質工学科の丹羽教授が「ホタルはなぜ光る？～中学生・高校生のための科学講座～」と題して、10月15日、11月19日、12月17日の3日間にわたる講座を開設し、30名の参加者がありました。

講座趣旨は以下の通りでした。

光る生物はホタルを初めとしていろいろなものがいられています。さまざまな発光生物を紹介しながらホタルが光を作る仕組みを簡単に説明します。ホタルの光を実際に試験管のなかで作って、「光とは何か」「どうして光ができるか」を一緒に考えましょう。

ホタルの光はさまざまな分野で利用されています。その利用法について簡単に解説します。その広がり的大小にきつと皆さんはびっくりされると思います。

1937年にノーベル生理・医学賞を受賞した Albert Szent-Gorgi は次のように語っています。”Discovery is seeing what everyone else has been seen and thinking what no one else has thought.”（誰も見て知っているけれど、それを見て、誰も思いつかなかったことをおみつけ、それが“発見”だ）。皆さんもホタルの光を見て誰も思いつかなかったようなことを思いついてください。それは21世紀を彩る新しい科学の幕開けかも知れません。

■ 7.3 映画上映会（言語学教室）

今年の夏頃、調布祭で英語の映画を上映しようという声が言語自習室の関係者（職員とティーチングアシスタント）から上がり、途中曲折がありながら、「隣のトトロ」と「ハウルの動く城」の英語版での上映にこぎつけました。上映の意図のひとつに、学園祭で本学を訪ねてくる人たちに「言語自習室」という大学の学習施設とそこでの活動の一端を見てほしい、ということがありました。また、映画を通して、子どもたちに大学という場に親しみを感じてほしい、ということもありました。

曲折のひとつは、上映する映画の選択です。ジブリにたどり着くまでにいくつか選択肢がありました。「トトロ」と「ハウルに決まってからは、著作権の心配が出てきました。学内の知的財産本部に相談し、教育機関で上映しても問題は起こらないという確証を得、学園祭が近くなってようやく「ゴー」となりました。

学内の奥まったところにある言語自習室にどれだけの人来ていただけるか心配でした。結果は次の通りです。

初日（11月18日）

トトロ 20名

（小学生以下：9名 高校生：1名 大学生：1名 社会人：9名）

ハウル 12名

（小学生以下：4名 大学生：2名 社会人：6名）

二日目（11月19日）

ハウル 10名

（小学生以下：2名 大学生：1名 社会人：7名）

トトロ 10名

（小学生以下：1名 大学生：3名 社会人：6名）

4回の上映で計52名。多い数ではありませんが、英語でトトロを聞く（例えば最初の歌の出しは Hey, let's go（歩こう））という不思議な体験を楽しんでいただけたのでは、と思います。

今年の11月にもまた、地域の方々を迎えることができればいいと思います。

*言語自習室（F棟102室）は、大学教育センター基礎教育 部門言語文化部会と技術部スタッフ、そしてティーチングシスタントにより運営されています。

7. その他支援事業

■ 7.4 大人のサイエンス

調布市主催、大人のサイエンスへの協力

調布市から、調布市文化・コミュニティ振興財団、調布市市民カレッジでは初めての企画である「大人のためのサイエンス」としてロボット製作講座の講師依頼が大学にあり、物づくり教育、電子工学工房の非常勤講師、竹内幸一（昭和44年電子工学科卒）が引き受け、実施した。（9月2日、9月16日開催）

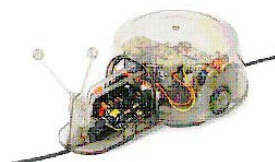
初めて電子工作を行うシニアの皆さんを対象として、黒い線で引かれたコースを辿りながら走るラインセンサーカーの製作とゲルマニウムラジオ製作を中心とした。

2回の製作日で行うので製作しやすい3種類の工作を行った。製作後も役にたつテスターも付属した。

初回の講習会なので7,500円の受講料に対して内容豊富にと合計4,600円の材料を奮発。

- ラインセンサーカーキット製作（田宮模型キット定価2,000円）
- ゲルマニウムラジオ製作（電通大少年少女発明クラブの十字アンテナ型材料1,000円）
- FM電波のステレオワイヤレスマイクキット（秋月電子キット1,000円）
- ゲルマラジオ受信電波測定と回路動作チェック用の安価なテスター（秋月600円）

参加者は60? 70歳台男性5名、70歳台女性1名、小学校6年の女子児童1名。
 アマチュア無線を楽しんでいる財団の職員もワイヤレスマイク工作の協力をしてくれた。
 かたつむりライントレーサー工作 価格2,000円 TAMIYAキット
 白い紙に書かれた黒い線に沿って、目をうごかしながら進むラインセンサーかたつむり。
 赤外線LEDと黒い線を検知するフォトトランジスタで左右2個のモーターをコントロールして進む。
 回路基板は配線済み。



電通大少年少女発明クラブ定番のゲルマニウムラジオ材料費1000円

100円ショップ、ダイソーの紙筒ラック用紙パイプと十字接続を利用し、エナメル線を四角いループに巻いた磁界受信型アンテナ。セラミックイヤホン250円、ポリバリコン250円、エナメル線30メートル300円と意外に材料費がかかるが調布では良く受信出来る。「たづくり」会館の窓際で受信OK。ゲルマニウムダイオードで検波した放送はテスターの針をふらせた。スベアナ、オシロも会場に持込んだ。

FMステレオ・トランスミッタキット 価格1,000円

NJM2035使用FMステレオミニ放送局キット単3電池1本で連続50~100時間動作

i-podの音楽出力をFMステレオ電波にしてカーラジオで聴くには便利。

付属のコンデンサーマイク2個でステレオワイヤレスマイクにもなる

アナログマルチメータ M1015B 1台 600円

ゲルマニウムラジオのイヤホン両端の直流電圧を測ることにより受信確認用に使った。

家庭での電気系統のトラブル探索にも便利になるようサービスでテスターも付属させた。

5機能15レンジ 低価格だが感度が高い

◆DCV：2.5/10/50/250/500V

◆ACV：10/50/250/500V

◆DCA：10mA/250mA

◆抵抗：20k/2MΩ

◆バッテリーテスト1.5V/9V

◆116x65x35mm、195g



やはり、かたつむりが動き出したとき、ゲルマニウムラジオが聴こえ始めたとき、みなさんそれぞれ感激し、和やかな雰囲気が出てきて、連帯感をもってそれぞれが工作を助けあって行った。

それぞれ、両日2時間の時間では短く、暗くなる時間まで「たづくり」の許されるぎりぎりまで工作に勤しんだ。

調布市立第一小学校、6年の女子児童は「大人のサイエンス」なのに参加し、手際もよくハンダも扱い優秀であった。

添付資料

[大人のサイエンス\(pdf\)](#)

大人の サイエンス

ラントレーサーやゲルマニウムラジオなどを作りながら、科学の面白さに触れます。つかの間忙しい日々を忘れ、少年だったあの頃を思い出してみませんか。

解説を受けながら工作をする、大人向けの科学講座です。

日 時 9月2日(土)・16日(土)
10時～12時 全2回

場 所 調布市文化会館たづくり11階 第2創作室

講 師 竹内 幸一(電気通信大学非常勤講師)

定 員 20人(応募多数の場合抽選)

受講料 7,500円(2回分・教材費含む)

締 切 8月10日(木)までに、往復はがきもしくは調布市文化会館たづくり1階の「市民カレッジ申込ポスト」でお申込ください。記入方法は、このチラシの裏面をご参照ください。

また、定員に満たない場合は、8月11日(金)9時から開講前日まで、電話(042-441-6171)で追加申込を受け付けます。



ラントレーサー：サインペンで書いた線の上をたどって進みます。



(財) 調布市文化・コミュニティ振興財団 事業課

TEL 042-441-6171

HOME PAGE <http://www.chofu-culture-community.org>

E-MAIL college@chofu-culture-community.org

8. アメリカの大学の地域貢献（特別寄稿）

■「アメリカの大学の地域貢献」 岡部一明(地域貢献部門客員准教授)

企業の社会的貢献活動の高まりの中で、アメリカの大学では、それを上まわる貢献の意識と活動が強まっており、今後、この流れは本格的に日本に入ってくると思われる。

■地域に開かれた大学

アメリカの大学の社会貢献を考える場合、まずアメリカの大学が設立の当初から深く社会貢献の責を担って設立されてきたことを確認する必要がある。これは、日本の大学が明治国家によって国を支える官僚や専門家の養成を主要な目的として始まったのと対照的である。

アメリカの大学には3系統あり、教養を主体とした私立のリベラルアーツ・カレッジ、専門的実学の州立大学、第二次大戦後に民衆の実学教育を目的に設立されるようになったコミュニティーカレッジ（公立地域短大）の系譜である。国立の大学は軍務関係の特殊な大学があるだけである。

リベラルアーツ系で最も古いのは1636年設立のハーバード大学だが、これは当初からNPO的な性格を強く持ち、篤志家や地域住民に支援され、マサチューセッツ植民地政府からの認定と財政支援を得ていた。州立大学は19世紀の産業革命の時代に急速に発展した制度で、現在でも学生数500万人以上をかかえ、私立大学の300万人よりも規模が大きい。ユニバーサル教育を目指すコミュニティーカレッジはさらにアメリカ独自のもので、学生数は500万を越す。日本の短大がほとんど私立であるのに対して、アメリカのコミュニティーカレッジは公立である。基本的に学びたい者が自由に入れる。2年制大学の学位もとれ、4年制大学編入への準備教育も行なうが、学位を目指さない一般の実業教育も行なわれている。こうした公立地域短大の理事会は地域で公選されるのが普通で、その会議は公開を義務づけられ、一般住民も傍聴・発言できる。

またアメリカの大学は全般に社会人学生が多く、これが地域とのつながりを直接的にしている。日本の社会人学生が5000人程度であるのに対して、アメリカにはそもそも「社会人学生」という言葉自体がなく、その統計もない。一旦社会に出た人が学びたくなくて大学に入ってくることがごく普通であり、それが大学である。例えばアメリカ国民22-24才の年齢層で、何らかの学校に就学している人の割合は24.9%、25-29才で11.9%、30-34才で6.6%、35才以上で2.1%である（以下、統計はStatistical Abstract of the United Statesなどによる）。お年寄りが大学に入った、卒業したなどのことがそれ自体では新聞記事にはならない。

こうした伝統をもつアメリカの大学は、施設構造的にも、キャンパス自体が地域に開かれている。日本の大学はどこも必ずと言っていいほど壁に囲まれ、門に守衛がいる。が、アメリカの公立の大学（州立大学や公立地域短大）には塀がない。少なくとも私が知る限り塀で囲まれた州立大学・公立地域短大はひとつもなかった。まるで公園のように地域に開けっぴろげで、だれでも自由に入ってくれる。どこからがキャンパスがわからない。ポートランド州立大学などは、道路を歩いているといつの間にか公園のような樹木林街になり、そこら中一帯が大学の建物になっている。大学が完全に街の一部に化している。アメリカでは現在、ゲーテッド・コミュニティーという壁に囲まれた大規模住宅地域が多数出現して問題になっているが、日本ではこのような地域社会がないのに対して、「ゲーテッド・ユニバシティ」が多数存在すると言えるのではないか。

カリフォルニア大学バークレー校を利用していた頃、キャンパス内でホームレスの人を見かけて驚愕した。地域に完全に開放されているからホームレスの人でも入って来れる。恐らく大学にとっては困ることだろうが、それほどまでに公開されていることに私は感動した。キャンパスに入ることも自由なら、学内の図書館に入ることも自由だ。カリフォルニア大学バークレー校図書館で聞き取り調査した時、利用者の三分の一が地域住民だと聞いて驚いた。そもそも図書館の入館チェックがなく、だれでも入れる。だから何割が学外者が正確な数はわからないのだが、たまたま事情で学部生用分館を学生のみに限ったところ、利用者が三分の一減ったので、通常の学外利用者は三分の一という推計をしたとのことだ。私立の大学でも、例えばスタンフォード大学などは図書館を市民に開放している。一応身分証明書を示して無料の入館証をつくって利用する。この両大学の図書館は蔵書数1000万冊に近く、日本の国会図書館の規模を上回る。カリフォルニア大学バークレー校図書館では、日本語の本だけで20万冊を超え、都立日比谷図書館蔵書数を上回る。こうした大規模大学図書館が地域に開かれていることで、地域に様々な効果があり、例えば、大学のまわりにシンクタンク系のNPOが多数立地することが可能になったと言われる。

だれでも自由に入れる大学は防犯上、問題なしとは言えない。大学でよく銃撃事件が起こるが、その際にもこうした壁のないキャンパス構造が問題視されることがある。しかし、大学の地域公開はアメリカの公立大学の基本であり、壁を張り巡らす措置をとったというニュースは聞かない。実際、銃撃事件の犯人が学生自身である事も多いので、ことさら「部外者」を警戒するのは偏見とも言える。

■大学の地域貢献ランキング

日本には、偏差値から見た大学のランキングというものがあり、週刊誌は、難関大学にどこの高校から何人入ったかなどという情報を載せる。アメリカでもこの種の大学ランキングは存在する。しかし、偏差値という単一の基準でなく、研究成果の質、就職動向、設備、教員あたりの学生数、寄付の集まり具合その他多様な指標からランク付けをする。だから意外と名前の知られない小規模大学が上位に来て、既成観念を崩すこともある。偏差値ランキングが学歴社会を強化するとすれば、こちらはそれを崩す役割を果たす。その中でとりわけユニークなのが『ワシントン・マンスリー』誌による社会貢献の面から評価した大学ランキングである。どれだけ貧困層学生の教育に効果をあげているか、補助金当たりどれくらい教育研究成果をあげているか、学生ボランティアなどどれだけ地域貢献を行なっている

か、その他多様な社会的貢献の側面を指標に大学を評価する。ちなみに2005年のトップ10は次の通りである（Washington Monthly, September 2005）。

1. マサチューセッツ工科大学（MIT）（7）
2. カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）（25）
3. カリフォルニア大学バークレー校（UCB）（20）
4. コーネル大学（13）
5. スタンフォード大学（5）
6. ペンシルバニア州立大学（48）
7. テキサスA & M大学（60）
8. カリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）（32）
9. ペンシルバニア大学（4）
10. ミシガン大学（25）

カッコの数字はU.S. News and World Report誌によるランク順位である。大学ランク付けでは最も権威があり、学力・研究成果を主とした伝統的大学排名である。『ワシントン・マンスリー』誌のランキングはこれとかなり異なる結果を出していることがわかる。伝統的評価で1位をわけあったハーバード大学とプリンストン大学はそれぞれ16位と44位だった。しかも『ワシントン・マンスリー』誌は、このランキングを特に「社会貢献ランキング」などと呼んでおらず、あくまで（形容詞なしの）大学排名、「トップ○○の大学」としている。社会に正当に貢献している大学を「よい大学」とする以外どんな評価があるのか、と言わんばかりの強い自負を感じさせる。

■スタンフォード大学とシリコンバレー

大学の地域貢献の代表事例として、シリコンバレーの技術開発の中心となるスタンフォード大学がある。シリコンバレーは、同大学が目的意識的につくりあげた世界的ハイテク産業地域であり、まれに見る成果をあげた大学の地域貢献モデルと言える。

現在のシリコンバレー地域（サンフランシスコの南、サンノゼ市を中心としたサンフランシスコ湾岸南部地域）は、第二次大戦前、果樹園が広がる農村地帯だった。1891年創立のスタンフォード大学がぼつりと建っていたが、地域に卒業生を受け入れる経済力がない。学生が、せっかく卒業しても東部に出て行かざるを得ないのを見て、同大学のフレデリック・ターマン教授らが地域にビジネスを起こす支援を開始する。

最初の成功事例はヒューレット・パッカード社。現在全米2位のコンピュータ機器企業である同社は1938年、2人のスタンフォード大卒業生、ウィリアム・ヒューレットとデイビッド・パッカードによってつくられた。彼らが起業したの粗末な木造ガレージは、現在「シリコンバレーの発祥の地」として州史跡に指定され、アイデアと技術力だけで挑戦するシリコンバレーの精神を象徴する場所となっている。

バレーはさらにトランジスターの発明者、ショックレーを引き寄せて半導体産業を生み、そこからフェアチャイルド、インテルなど精鋭企業が生まれ、1970年代には、パソコン革命の震源地となって、アップル社その他のパソコン産業を生み、1990年代にはインターネット革命を率い、ネットスケープ、ヤフー、グーグルなどの新興企業を次々に生む。

卒業生たちを受け入れる力のなかった地域経済は一新され、世界的な頭脳労働集積地が変わった。例えばマサチューセッツ工科大学（MIT）の同窓会によれば、シリコンバレーに同大学卒業生が約7000人来ており、地元ボストン、ニューヨークに迫る集中場所とのことだ。1995年にはシリコンバレーの新会社のうち287社がMIT出身者によって創設されたという。アジアからの移民、留学生たちも多く、カリフォルニア公共政策研究所の1999年調査では、シリコンバレーの科学者・エンジニアの32%が海外からの移民で、過去18年間にシリコンバレーで創業されたハイテク企業（11,443社）の四分の一が中国系とインド系によるものだった。彼らはシリコンバレーと母国の経済・技術交流も深めながら、アメリカのグローバル経済化に決定的役割を果たしている。スタンフォード大学は、これらの過程で一貫して大学の地域連携の姿勢をとり、学生・卒業生・教授らが積極的に地域で起業し、また地域の企業活動が同大学の技術開発を刺激するという好循環を産んでいった。その広大な敷地に「スタンフォード工業団地」をつくり、卒業生などが立ち上げた起業を積極的にここに誘致し、インキュベーターの役割を果たした。

■サービス・ラーニング

アメリカの大学の地域貢献で現在、最も注目されているのが、「サービスラーニング」（Service Learning）、「地域に基礎をおく学習」（Community-Based Learning）などと呼ばれる地域体験型の教育・学習手法である。オレゴン州のポートランド州立大学（5学部、全学生2万人）はこうしたCBL、SLの全米先進事例であり、1993年から全学のカリキュラムを大規模改変作業に着手し、各授業に地域体験の要素を盛り込んでいる。最終学年の「キャップストーン・クラス」（冠石授業）では全学生が授業での講義以外に80-100時間の地域活動による学習を行なう。現在ではこれが全学的に必修化され、数千人の学生が約200のコースに分かれ履修する。提携する地域住民団体（NPO）は1000を越え、学生は様々なボランティア的に取り組みながら地域問題を学び、クラスでの討論、補助学習をも踏まえてその解決の糸口をさぐっていく。

アメリカの大学には、学生にボランティア活動を紹介する支援センターがあり、学生の自主的ボランティア活動は盛んである。また、将来の就職と結びついた実習・インターン制度も広く取り入れられている。しかし、サービスラーニングはこれらと違って、あくまで学習目的のための地域体験であり、通常の授業の中にボランティア活動を取り入れた学習手法であることに特色がある。サービスラーニングは、現在のアメリカにおける大学改革の主要な柱とされ、全米3700の大学など高等教育機関のうち、こうした地域密着型教育に力を入れる639大学が全米連絡組織「キャンパス・コンパクト」を形成している。同連合に加盟する大学についての調査（1999年）では、全体で計11,876の地域研修型科目が設置されていた（各大学平均19科目）。76%が地域連携のセクションをもち、64%が「地域サービス・ディレクター」を有していた。連邦政府も1990年全米地域サービス法、93年全米地域サービス法信託法などにより同

制度の整備を図る。特に全米サービス公社（Corporation for National Service, CNS）の中の「アメリカに学び貢献」（Learn and Serve America）プログラムが中心となり、幼稚園から大学まで毎年約100万人へのボランティア活動支援助成が行われている。ポートランド州立大学でサービラーニングを担当し、私達の共同研究者でもあるスティーブ・ジョンソン特命教授によれば、こうした体験型学習は、今日の大学がかかえる内部的な課題から生まれた側面もあるという。「MTV（映像型の音楽番組）のようなものに慣れ親しんでいる学生の生活からは、大学の授業が非常につまらないものを感じる。授業に様々な行き詰まりが見られ、どうすれば学生の興味を喚起できるか、どんな新しい教育方法があるのか、私たちは模索した。」とプログラム設立の経緯を説明している。

教壇から教えるだけの教育は時代に適合しなくなったとの認識は日米を問わず広がっている。若い人たちが地域リソースを全面的に利用しながら、実際問題に取り組み、物事を考え、成長していく。その中で大学教育機関が「コーチ」的役割を果たすというのがサービラーニングの考え方だろう。行き詰まりに直面した大学教育の新しい活路、21世紀の教育・大学改革の課題としてもサービラーニングがとらえられている点が重要だ。

体験型学習を取り入れる上で、「意外と教員の問題が大きい」ともジョンソン教授は言う。地域連携プログラムをつくるにはカリキュラムを変えなければならず、社会体験の中で教育できるノウハウを身につけなければならない。いろいろな仕事が増える。講義型の授業と違って、学習に不測の展開も生じやすい。学問的領域も単一のものとどまっていない。教員によってこうした点が嫌われることもある。「したがって、このような地域を基礎にした学習を組んでいくためには、教員に対する様々な支援が必要だ。先進的教員のプログラムを大いに延ばし、他の教員が参考にできるようにする。各種会議、勉強会への出席、カリキュラム作成への助成などを行なう」と同教授は言う。さらに研究者としての教員に、こうした体験型学習へのインセンティブもつけなければならない。これまでの学界では、地域を基礎とした学習を実施してもあまり評価されなかったが、ポートランド州立大学では、テニュア（終身教授資格）を認める際の資格要件を変え、学術論文だけではなく「地域と連携した学習」活動でどれだけの成果を上げているかも正当に評価するようにした。こうした全般的な評価、ガイドラインの改革がないと教員も変わりにくい。大学間を移動する教員の状況も考えると、他大学も含めて評価の基準を変えていかなければならない。「今後は全米的に、こうした評価の問題も含めてサービラーニングを支援する大学の体制を変えていく必要がある」とジョンソン教授。「サービラーニングが拡大する中で、コミュニティーや地域活動に関する学術的な調査研究が活発化している。この分野の論文も増え、様々な学会も形成されている。」と、学界をも巻き込む今後の方向を示唆している。